

各位

金蘭千里中学校

## 本校入学者選抜試験問題に関するお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

### 記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。

2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

# 令和6年度中学入試

## [中期B・J入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2. この問題冊子は、表紙を含めて20ページあります。

試験中に、印刷が見づらかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場

合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。

4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離して

はいけません。

[中期B・J入試] 受験番号\_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

① 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

八時四十分。

いつもどおり、始業まで二十分の余裕をもつて会社のビルに着いた私は、エレベーターに向かう人波を避けるように、非常階段へと向かう。ヒールの靴の足元を確かめて、一つ深呼吸をして手すりを握り、階段を上り始める。十二段の階段、踊り場、再び十二段の階段、一つ上の階へ……。二十階にある職場まで、それを繰り返す。

① 一ヶ月ほど前から、私は毎朝、非常階段を使つて職場に向かうようになった。やつてみると、二十階まで自分の足で上ることを、雲の高みに登るかのように考えていたが、今ではすっかり習慣となつてしまつていた。

ダイエットや運動のためにやつていてるわけではない。一ヶ月前のその朝、不意に、朝のエレベーターに乗りたくなくなつてしまつたのだ。もちろん、始業時間に合わせて一斉に出社する社員による混雑ぶりには辟易していたが、混雑度でいえば通勤電車の比ではない。痴漢だつていないし、我慢するのもせいぜい一、二分だ。

それでもなお、朝のエレベーターには乗りたくないなつたからだ。朝の私は不機嫌だ。不機嫌な私は、ロツカーデ事務服に着替えてはじめて、「会社の私」に切り替わる。その前の顔というのを、同僚たちの誰にも見せたくないなつたし、誰にも話しかけられたくなかったのだ。

靴音のリズムを崩さないようにして、階段を上り続ける。このビルには非常階段が三ヶ所あるが、最も奥まった位置にあるこの階段は、めつたにも通らない。飾り気のない、無機質で単調な空間は、人を自らの内側へ向かわせるのだろうか。私は、様々なことを考えながら階段を上るようになつていた。

この会社で働き始めて二年になる。顧客管理の入力作業と、データ管理が私の業務だ。独創性が求められる仕事ではなく、学んできた技術を活かせるわけでもないが、やりがいはほどほどにある。A（　）もなく不（　）もない、そんな単調な仕事の毎日になぞらえるかのようだ。

十七階と十八階の間の踊り場で、さすがに弾んできた息を整えながら、私は立ち止まつた。いつもと違うことに気が付いたからだ。

「本が……、変わってる」

この場所に本棚があることは、はじめてこの階段を使つた朝に気が付いていた。ビルの建設当初からあるらしく、壁面に据え置かれた、ガラスの引き戸がついた本棚だ。

何の掲示もなく、ビル内の誰かが利用しているようでもなかつた。実際、階段を使うようになつて一ヶ月が経つが、本のaバイチが変わった様子はまったくなかつたからだ。

それが、今日になつて中の本がまったく変わつているのだ。一冊一冊の本の題名はもちろん覚えてはいないが、雰囲気はがらりと変わつていた。

私はかがみこんで、はじめて本棚のガラスの引き戸を開く。中は三段に仕切られ、本は大きさをきちんと揃えてハイチされていた。背表紙の下には、一様に青いシールが貼られている。

私は手にして気付いた。その本にも、そして本棚の中のいずれの本にも、著者名が記されていないことに。本のジャンルは、小説、実用書、写真集、詩集と様々だったが、書店では見かけたことのない題名ばかりだった。

そんなことがあってから、私は朝の通勤時だけでなく、普段も非常階段を気にかけるようになつた。自分でも、あんな忘れ去られたような本棚がどうして気になるのかはわからなかつたが、いつたい誰が何のためにあの本棚の本を用意し、きちんと管理しているのかを知りたくなつたのだ。

それからしばらく経つたある日、一つ下の階に資料を届けるために非常階段を利用していた私は、何か気配を感じて、耳を澄ませた。本棚のあるあたりで、作業をするような物音がする。私は書類を抱えたまま、階段を駆け下りた。

本棚のある踊り場では、②一人の男性が、まさに本を入れ換えていた最中だつた。私と同年代くらいのその人物は、息を切らして下りてきた私を見て、少し驚いた表情だつた。

「どうしてこんな所に本棚があるんですか？」  
息を整えることもなく、彼にたずねる。

「ああ、何だつてこんな高い階に作つちまつたんだかな。おかげで入れ換えも大変だよ」  
座り込んで本を抱えたbカヅコウの彼は、職人肌の技術者を思わせる、Bぶつきらぼうな態度だつた。

「そうじやなくつて、何でこんなところに意味もなく本棚があるのつてことを聞いてるんですよ」

彼は作業の手を止め、再び私を見上げた。

「今さら、そんなこと言われてもなあ」

彼は帽子を取ると、どう説明したのか、というようにごしごしと頭をかく。

「この街にも、ここと同じような本棚はいくつもあるじやないか。何しろ俺は全部で八十の本棚を管理しているんだから」

思つてもいいない言葉だつた。私は記憶を辿るまでもなく、首を振つた。

「そんな本棚なんて、街で見たことなんてないし」

「見えていなかつただけだよ」

即座にそう切り返されて、少しむつとして言い返す。

「私はそんな不注意な人間じやありません」

彼は、何を思ったのか急に立ち上がり、私の背後に回る。振り向こうとすると、彼は「そのまま」と言つて、私が動くのをとどめた。

「君は、俺の着ている上着の色を覚えているかい？」

とつさにそんなことを聞かれて、今まで目の前にいた彼の服装を思い返そうとするが、どんな服だったかまでは覚えていなかつた。

「ほらね。見ても、見えていないものは、たくさんあるつてことだよ」

何だかうまく言いくるめられた気がして、③私は小さく唇を噛んだ。彼は再び本を抱えて作業をcザイカイしながら、問わず語りにこの本棚のことを話してくれた。

「このビルが建つ前には、ここには大きなお屋敷があつてな。その辯の一画にこの本棚はあつたんだ。建物が取り壊されて、このビルが建つ時、（注1）地権者のdイコウで、同じ場所に残されたんだよ。もつとも、非常階段の、しかもこんな高い場所に追いやられてしまつたがね」

そう言つて本棚を見つめる彼の瞳は、慈愛に満ちていた。単なる仕事として以上に、この本棚に関わることを喜びとしているようだ。

「それじやあ本当に、街の中にも、これと同じ本棚がたくさんあるんですか？」

「ああ、今の君には見つけられないのかもしれないけど、本棚は隠れているわけじやない。いつでも、必要とする誰かのために、本棚はあるんだ。そしてその誰かのために、俺が本を用意する」

自分のなすべきことへの、揺るぎない自信。そんな風に仕事に誇りを持てることが、今の自分と比べてうらやましくもあつたし、読まれてもいらない本を用意する日々にそんな誇りが持てるものかと、疑わしくも思つた。

「でも、こんな所に本棚があるなんて、うちの会社の社員も誰も気にも留めていないし、誰も利用していないんじやないですか？」

「確かに、前回入れ換えに来た時から、本が読まれた形跡はないね。残念ながら」

言葉とは裏腹に、彼はたいして残念そうでもなかつた。

「だつたら、こんな所に本棚を作つて管理していくも、何も意味がないじやないですか」

さつき、うまく言いくるめられてしまつたことへの微かな反抗もあり、少し意地悪な言い方をしてみる。彼は、何だか不思議そうな顔で問い合わせしてきた。

「君は、例えば、この街で五年間火事が起こらなかつたとしたら、消防車なんていらないって思うかい？」

屁理屈にしか聞こえない。ロンボウに、思わずため息をついた。

「本棚と消防車は違うでしょ？ 消防車つていうのは、いつ起ころかわからない火事のためにあるんだから」

④彼は、その通り、というように大きく頷いた。

「この本棚も同じだよ。いつか誰かが、ここにある本を必要とする時が来るかもしれない。その時のために俺が本を準備する。非常に意味が

ある行為だ

私の「意味がない」という言葉に対するためか、最後の部分は殊更に強調された。

私がまだ納得しない表情だからか、彼は少し考るようすを仰ぎ、再び口を開いた。

「それじやあ、聞き方を変えようか」

立ち上がった彼は、私をのぞきこむようにして言った。

「君は、誰からも必要とされていなかつたら、存在価値はないのかい？」

思つてもみない問いを投げかけられ、私は答えに窮してしまつた。

——存在価値……、私は、誰かに必要とされている……？

自らに問う言葉が、私の中でこだまする。なぜだか、この非常階段を上り続ける単調な日々が、心に浮かんだ。

「それは……」

否定しようとして、言葉に詰まつてしまふ。私を必要としてくれる誰の姿も、浮かんでこなかつたからだ。<sup>⑤</sup>そんな私の様子を察して、彼は今までにない穏やかな表情で、私に笑いかけた。

「君が君として生きていることに、価値はあるし、きっと誰かが君を必要としている。そうだろう？」

「……：そう思いたいけど。 うなのかな？」

「その答えは、君が自分で見つけなきやな」

彼は笑顔を残したまま、私の頭をポンと叩いた。

本をすべて入れ替え、（注2）背負子のような大きな箱にもともとあつた本を収めた彼は、身軽にそれを背負い、非常階段を下りていつた。

それから程なくして、私はその会社を辞め、別の街で働き出した。

仕事帰りの電車の車窓からは、遠くにかつての職場のビルが見える。心によみがえるのはなぜか、あの非常階段を上り続けた日々と、小さな本棚だった。

あれ以来、一度も訪れてはいない。だけど、きっと今もあの本棚は、十七階と十八階の間の踊り場で、ひつそりと、いつか自分が必要としてくれる誰かを待ち続けているのだろう。

仕事は変われど、私の毎日は、さほど変わったわけではない。通勤電車に揺られ、会社に通う毎日だ。今の会社は一階にあるので、非常階段を使うことはなくなつたけれど。

だけど、一つだけ変わつたことがある。私には見えるようになったのだ。彼の言う、街角の名もなき本棚たちの姿が。

電車に乗っていて、踏切のすぐそばに見つけた、雨ざらしの小さな本棚。商店街の電柱の陰に置かれた本棚。首都高速の高架下にひつそりと置かれた本棚。

人目をひくこともなく、そこにあるのに誰もが見えないよう通りすぎる、いたずらさえされない、名もなき本棚たち。いつか私もあるの本棚を必要とする時が来て、ガラスの引き戸を開けて本を手にすることがあるだろうか。その時はまた、あの風変わりな彼に会えるのだろうか。

電車の窓にもたれ、物思いにふけっていた私は、アナウンスの声が駅名を告げるのを聞いて、あわてて降りた。行きかう名もなき人々と、名もなき私。<sup>(6)</sup>改札口に向かう人波の中で、思わず立ち止まる。私は流れをとどめる杭となり、向かい来る人々がCいふかしげな視線を私に向け、避けるように歩き去る。

すれ違う人々の記憶の中に、私は一瞬も残りはしない。私も、そして誰もが皆、「名もなき誰か」なのだ。私の存在は、なんてちっぽけなのだろう。人波の中に、あっけなく消えてしまうほどに。

——だけど……

私は、心中でそうつぶやく。だけどその感覚は、決して嫌ではなかつた。ちっぽけだからこそ、自分が愛おしく思える瞬間があるし、「がんばれよ、自分！」と自分を抱きしめるように励ますこともできるのだから。

一人の中年男性が、手にしたものに気を取られていたのか、立ち止まつている私に気付いてあわてて目の前で足をとめた。

「失礼」

男性は、小さな笑顔を浮かべて私に会釈をした。通りすぎる男性に、私も笑顔を返す。その手には、青いシールの貼られた本……。<sup>(7)</sup>私は男性の後ろ姿を見送り、彼の姿が人波にまぎれて消えてしまうと、小さく頷いて、再び歩きだした。

改札口では、「名もなき私」を必要としてくれる人が、笑顔で手を振っていた。

(三崎亜記「名もなき本棚」より一部改めたところがある)

(注1) 地権者……その土地を所有している者。ここではビルの建っている土地の権利を持つている者のこと。

(注2) 背負子……荷物をくくりつけて背負う木の枠。背負いばし。

(一) 波線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ハイチ b カツコウ c サイカイ d イコウ e ロンポウ

(二) 二重傍線部 A 「( ) もなく不( ) もない」は「平凡・普通であること」という意味の言葉である。( ) に同じ漢字を一字入れて、言葉を完成させなさい。

(三) 二重傍線部 B 「ぶつきらぼうな」・C 「いぶかしげな」の、この文章の中での意味としてもっとも適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

B 「ぶつきらぼうな」

ア 真じめそうな

イ 少しづれた

ウ 不満ありげな

エ 愛想のない

C 「いぶかしげな」

ア 疑わしそうな

イ 怒りをこめた

ウ どうしていいのかわからない

エ 驚いたような

(四) 傍線部① 「一ヶ月ほど前から、私は毎朝、非常階段を使って職場に向かうようになった」について次の問いに答えなさい。

(1) なぜ「私」は「非常階段を使って職場に向かうようになった」のか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 朝のエレベーターの混雑に辟易していたので、それを避けて会社に行きたいと思うようになったから。

イ 朝の混雑したエレベーターの中ではゆっくりとものを考えることができないと思うようになったから。

ウ 朝のエレベーターの中で不機嫌な「私」が会社の「私」に変わることを見られたくないと思うようになったから。

エ 朝の「私」の不機嫌な顔を見られたくないので、エレベーターには乗りたくないと思うようになったから。

(2) 「私」が毎朝使う非常階段について説明した文としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まるで「私」の毎日の単調な仕事のように、上っても上っても変わりばえのしない風景が続いている。

イ 三ヶ所ある非常階段の一番手前にあるが、少し奥まつたところに入口があるためあまり使われていない。

ウ 十八階から十九階の踊り場の壁面にはあとからしつらえられたと思しきガラスの引き戸がついた本棚がある。

エ 階段を使うようになつて一ヶ月の間まったく変化のなかつた本棚の本の並びが、ある日ほんの少し変わつていた。

(五) 傍線部②「一人の男性が、まさに本を入れ換えていた最中だつた」にある「一人の男性」について説明した文としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」と同じくらいの年の男性で、本の入れ替えをするなど、この街にあるたくさんの本棚の管理をおこなつていてる。

イ 「私」と同じくらいの年の男性で、本棚のできたいきさつをよく知らないまま、お屋敷の人間に頼まれて本の補充を続けている。

ウ 「私」と同じくらいの年の男性で、本棚にかかる仕事に喜びを感じながらも、本棚の本が読まれていないことを悲しんでいる。

エ 「私」と同じくらいの年の男性で、技術者としての仕事のかたわら、本棚の管理の仕事に誇りを持つてたずさわっている。

(六) 傍線部③「私は小さく唇くちびるを噛かんだ」とあるが、なぜ「私」は「唇を噛んだ」のか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見えていても見えないものがあると言われて、自分の注意力のなさを指摘されたように思つて悲しくなつたから。

イ 見えていても見えないものがあると言われて、うまく丸め込まれたような気がして自分のいたらなさを痛感したから。

ウ 見えていても見えないものがあると言われて、都合よく説得されてしまつたような気持ちになつてくやしかつたから。エ 見えていても見えないものがあると言われて、にわかには信じられなくてどうしていいのかわからなくなつたから。

(七) 傍線部④「彼は、その通り、というように大きく頷うなずいた」とあるが、このように大きく頷くことで、「彼」は何を言おうとしているのか。その答えとしてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 非常階段の本棚は消防車と同じで、いつもは人の目につかないところに隠かくされているが、必要となつたときには表にあらわれて人のためにいろいろなことをしてくれるのだ、ということ。

イ 非常階段の本棚は消防車と同じで、ふだんは意識されることはないかもしれないが、いつか必要とされるときのために、常に使える状態になっているのだ、ということ。

ウ 非常階段の本棚は消防車と同じで、通常はまったく無視されているかもしれないが、それが必要になるときが近づいているので用意を怠おこなないようにしているのだ、ということ。

エ 非常階段の本棚は消防車と同じで、日々の暮らしの中ではなくてもいいものとされているかもしれないが、それを好きな人がいるのでその人のために使つてもらえるようにしているのだ、ということ。

(八) 傍線部⑤「そんな私の様子を察して、彼は今までにない穏やかな表情で、私に笑いかけた」とあるが、このように「私に笑いかけた」

ときの「彼」について説明した文としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分には存在価値がないから今の単調な仕事を続けるしかないのだと落ち込んでしまった「私」を見て、がんばればきっと存在価値

を自分で見つけられるはずだと元気づけようとしている。

イ 自分は誰からも必要とされておらず、自分には存在価値などないのでないかとふと思つて言葉につまつてしまった「私」を見て、

そんなことはないのだと励まそうとしている。

ウ 自分を必要としてくれる人の姿が思ひ浮かばなくて次の言葉が出てこなくなつた「私」を見て、君ならだいじょうぶだから自信をも

つて今の仕事を続けなさいと勇気づけている。

エ 「必要とされていなかつたら存在価値はないのか」と問われて、「ちがう」と言えなくて涙ぐんでしまう「私」を見て、気にしな

くてもいいとなぐさめようとしてくれている。

(九) 傍線部⑥「改札口に向かう人波の中で、思わず立ち止まる」とあるが、なぜ「私」は「思わず立ち止ま」つたのか。その理由としても

つとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 電車の中でもの思いにふけつてているうちに、人はみな「名もなき誰か」であるというこの世の真実に気づき、そのことをずっと考え

つづけていたから。

イ 改札口に向かうときに突然非常階段にあつた本棚のことを思い出したことで、自分が人の記憶の中に残ることのないちっぽけな存在であることに気づいて悲しくなつたから。

ウ 駅の出口に向かつていく中で、向かつてくる人が自分を避けて通るのに気づき、自分などこの世の中に必要とされておらず、あつけなく消えていく存在であることを知つたから。

エ 目的地の駅で降りて行きかう人の姿を見ているうちに、人は誰もが「名もなき誰か」で自分の存在はとても小さなものであるとふと気づいたから。

(十) 傍線部⑦「私は男性の後ろ姿を見送り、彼の姿が人波にまぎれて消えてしまうと、小さく頷いて、再び歩きだした」とあるが、このときの「私」について説明した文としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 青いシールの貼られた本のことを知る人が自分の他にもいることに気づき、きっとこの男性も自分が「名もなき誰か」であることを意識しつつがんばっているのだと考えた。

イ 青いシールの貼られた本のことを知る人が自分の他にもいることに気づき、街のいたるところにある見えない本棚の存在を知る仲間をふやしていこうと決意した。

ウ 青いシールの貼られた本のことを知る人が自分の他にもいることに気づき、非常階段の本棚での出来事を思い起こし、ちっぽけな「名もなき誰か」である自分を勇気づけている。

エ 青いシールの貼られた本のことを知る人が自分の他にもいることに気づき、本棚の本が、困つてどうしようもなくなった「私」たちを助けてくれているのだと知つてうれしくなった。

(十一) この作品を読みおわって、六人の生徒たちが話し合っている。次の生徒1～生徒6の発言のうち、本文から読み取れる内容としてもつとも適切なことを言っているのはどれか。次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒1..誰からも必要とされていなかつたら価値がないって言つてるけど、ぼくは誰からも必要とされず、一人でいるほうが楽でいいな。主人公もきっとそうだよ。

イ 生徒2..ちがうわ、だつて、主人公は一人でいるのはさびしいことだと思つていて、自分を必要とする人が自分を待つてくれていると考えていたでしょ。

ウ 生徒3..そうかなあ、主人公は自分のことを必要としている人なんていないんじやないかと、最初ちょっとだけ思つていて、自分を必要とする人が自分を待つてくれているうけど。

エ 生徒4..でも非常階段の本棚のところで自分を必要とする人に会つたから、その考えがまちがいだつて主人公は気づいたんじやないかな。

オ 生徒5..そうか、本棚を整理していた人のことだね。そしてその人が最後の場面に出てくる「名もなき私」を必要としてくれる人」だね。…わからなかつたよ。

カ 生徒6..自分が必要とされているとわかつて生きる勇気がわいてきたんだと思うわ。だから主人公は別の街に引っ越してそれまで勤めていた会社を辞めたのね。

②次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

これまで、現代日本人の宗教と信仰に関しては、さまざまアンケート調査がなされてきました。①いま、どのくらいの日本人が宗教を「信じ」ている／いないのでしょうか。

統計結果には、各調査（省庁、N H K、大学、世論調査会社などによる）によつて、それぞれ若干の違いはあります。ここで厳密な数字を示すことは困難ですが、さしあたりの目安としては、現在特に何も宗教を信じていない人は全体の六〇～七〇%をしめ、自覚的な無神論者も約三〇%にのぼるようです。こうした数字を見ますと、日本は無宗教・無神論の人があとでも多い国であるような印象を受けます。ところが、実際の日本人の多くは、当たり前のよう<sup>しょう</sup>に宗教的な冠婚葬祭の儀礼を行つていますし、ときには神社<sup>a</sup>ブツカク巡りもします。特に正月には、人々は初詣<sup>はつもうで</sup>と称して全国各地の宗教施設に押し寄せます。普段も、占いや開運グッズなどに関心をもつ人は少なくありませんし、何かをする際に、縁起<sup>えんぎ</sup>が良いとか悪いとか言つたりもします。では、日本人は本当に宗教を「信じていない」のでしょうか。

「信じている」のか「信じていない」のか、という判別の難しさは、日本人に限つた話ではありません。ヨーロッパではこれまでキリスト教が圧倒的な影響力を持つきましたが、二〇世紀半ばから、bレイハイ出席率は低下の一途をたどっています。こうしたデータだけを見れば、ヨーロッパの人々も宗教から離れていくつているように見えます。B、教会には通わないけれどもキリスト教的伝統には一定の信頼を寄せている人は依然として多くいます。ほとんど教会には行かないし、毎日神に祈つてゐるわけではないけれども、聖書に記されている基本的メッセージを自らの人生のcシシンとしている、という人は今でも決して少なくないようです。つまり、「教会離れ」がすなわち無神論や無宗教とイコールになるというわけではありません。

これまで宗教学者たちは、②こうした傾向<sup>じょうこう</sup>をどのように理解すべきか、さまざまに議論してきました。ある宗教学者は、日常的に心から信じているわけではないけれどもゆるやかな情緒や関心から伝統的宗教と関わり続けることを、「信仰のない宗教」と表現しました。また別の宗教学者は、特定の宗教団体には所属しないけれども広い意味での宗教的関心はあるといつた状態のことを指して「所属なき信仰」と呼びました。また逆に、厳密な意味での信仰的動機ではなく、もっぱら音楽や歌などと関わることを求めて教会とつながり続けるなどのあり方を指して「信仰なき所属」と呼んだ人もいます。

（中略）

C、そもそもこうした議論における「信仰」とは、いつたいどういう行為や姿勢のことを指しているのでしょうか。しばしば、「宗教」という言葉の定義は宗教学者の数だけあるなどとも言われますが、「信仰」という言葉も決してdジメイなものではありません。「宗教」が非常に曖昧な概念であるように、「信仰」もかなり曖昧な概念です。「信仰」とは、要するに「信じること」だという理解でいいのでしょ

うか。では、③「信じる」とはいったいどういう意味なのでしょうか。〈中略〉

一般に何かを「信じる」と言うときは、その対象や事柄を「正しい」と判断しているという意味で使われることも多いと思います。「私はAさんよりもBさんを信じる」と言うときは、すなわち「私はBさんが正しいと考えている」という意味になります。しかし、本当にどう考えても正しいものについては、それを「信じ」る必要はないはずです。例えば、目の前で火が燃えていたら、「火が燃えている」と言えば十分で、わざわざ「火が燃えていると信じる」と言う人はいません。三角形の内角の和は二直角であるとか、平行する二直線は交わらないということも、それらは「正しい」ので、わざわざ「信じ」る必要はありません。明らかに正しいことは、信じなくていいのです。

では、「正しいことは信じる必要がない」といたしますと、「私は神を信じる」のように、あえて「信じる」と口に出すことは奇妙であるようにも思えます。本当に心から「神が存在する」と考えているのならば、わざわざ「信じる」と口に出す必要がないからです。ひょっとしたら神などいないという可能性もあることを内心では認めていて、神の存在に十分な自信は持てないからこそ、「信じる」と口にしているのでしょうか。

そういう場合もあるかもしれません。私たちはある事柄について、それが正しいことや真理であることを微塵も疑つてはいないけれども、客観的に証明するのはむつかしいことや、証明はできないけれども疑う必然性や理由が思いつかない事柄については、「信じる」と表現するしかないからです。私たちは、愛、正義、平和などを尊重することの理由を、いちいち合理的に説明することはしません。しかし、それにもかかわらず多くの人々がそれらの価値をジメイだと考えているという状況は、つまりは「信じている」ということになるのではないでしようか。宗教・信仰に関しても、客観的にはその真理性や妥当性を証明できない事柄ですから、やはり「信じる」という表現を用いるしかないのかもしれません。

〈中略〉しかし、信じているその内容についてではなく、皆でそろつて「○○を信じます」と口に出す行為そのものについて考えてみますと、やはりどうしても気になることがあります。というのは、「信じます」とわざわざ口に出す行為に固執すること自体が、そもそもその前提として、実は「疑う」という選択肢が頭の中にあるからではないか、という推測もやはり捨てきれないからです。

一般に、人は、本当に心から何かを信じきっていたら、「疑う」という発想自体がなくなるので、実際には「信じます」とか「信じましょう」という言葉は口から出てこなくなるものではないでしようか。私たちは、心から何かを信じていれば、ただ信じているその事柄を前提に、考えたり行動したりするだけになるものです。逆説的な言い方になりますが、「信じている」という自覚さえなくなつたときに、ようやくそな人は本当の意味で「信じている」ということになる、と言つてもいいでしよう。

例えば、わざわざ現金を手にして「私はこれら貨幣の価値を信じています」と口に出す人はいません。□ D □、ほぼすべての日本人は貨幣の価値を本当に信じきっているからです。ルーブル美術館に行ってモナ・リザを指差し、わざわざ「私はこれを本物だと信じます」と口に出す観光客もまざいません。なぜなら、誰もがそれを本物だと信じきっているからです。めでたく大学入試に合格した青年に対して、友人

や家族が「私たちは君がカンニングなんかせず、正々堂々と試験を受けたのだと信じているよ」なんてわざわざ言つたら、その青年はひどく傷つくでしょう。「信じている」と言われたことでかえつて「疑われている」と感じるからです。

④本当に何かを信じ切つている人にとっては、「自分自身のその「信じる」という行為は透明になつて見えなくなる」はずです。「私は○○を信じています」と自覚し、そう口に出すのは疑う余地もありうことや、実は十分に自分には信じきれていないことの「eアンジ」になつてしまふ場合もあるよう思います。そうした意味で、私は⑤(注1)信徒たちが「○○を信じます」とわざわざ口に出すこと、そこはかとない違和感を覚えることがあるというわけです。

ただし、次のように考えれば、違和感はなくなるかもしません。すなわち、信徒はこの「(注2)使徒信条」やその他における「○○を信じます」という言葉を、実は神様に對して言つているのではなくて、あくまでも教会の仲間たちに對して言つている、という風にとらえるのです。神様に對して「信じています」と言つているのではなく、教会の仲間同士で「私は神を信じているけれど、あなたも信じていますよね」「私たち、同じものを信じていますよね」と互いに確認しあつて、宗教団体としての連帶を意識し、團結を強めることができることが真の狙いなのかかもしれません。もしそうだとするならば、こうした「○○を信じます」という定型文を作つて、皆で一緒にそれを口に出して唱えることの意義もよくわかります。

#### （中略）

キリスト教信仰においては、まず聖書の權威を「信じ」て、そしてそこに書かれている内容も正しいと「信じ」ることが大前提となります。しかし、キリスト教徒は聖書に書かれていることを本当にすべて「信じ」ているのでしょうか。実際の信徒たちを見ていると、はつきり言つて、そのように見えません。

例えば、新約聖書の「(注3)コリントの信徒への手紙一」の一章には、「男はだれでも祈つたり、預言したりする際に、頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになります。女はだれでも祈つたり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります」と書かれています。聖書にそう書かれているのなら、実際のレイハイでは男性は頭に何もかぶらず、女性は頭に何かをかぶつていそうなものです。しかし現在は、一部の人たちを除いて、ほとんどの女性はレイハイ中に何もかぶつていません。逆に男性の聖職者で、頭に大きな帽子のようなものをかぶる伝統のある教派もあります。これは、いつたいどういうことなのでしょうか。また、聖書のこの箇所のすぐ後には、「男は長い髪が恥であるのに対し、女は長い髪が誉れとなる」と続いています。そう書かれているのなら、キリスト教徒の男性は髪を短くし、女性は髪を伸ばしそうなものですが、実際には、牧師や信徒にも長髪の男性はいますし、ショートヘアの女性もいます。これも、いつたいどういうことなのでしょうか。つまり信徒たちは、口には出しませんが、内心では「聖書といえども、この記述はさすがにどうでもいい」と判断しているということになりそうです。⑥信仰の基準である聖書においても、「まともにとりあわなくていい部分」、すなわち「信じなくていい部分」がある、ということになります。髪の毛とかぶりものに関するこの箇所については、もちろん(注4)聖書註解

書を開けば、いろいろな解説がなされています。この記述の背後には、当時の身なりに関する習俗や慣習があるわけです。しかし、いざれにしても、聖書のなかで、現代人がちゃんと「信じ」て実践すべき記述と、適当に読み流していい記述（あまり「信じ」なくていい記述）とは、どうやって区別するのかが、どうもよくわかりません。

（中略）

キリスト教徒たちは、「金持ちが天の国に入るのは難しい」というイエスの言葉を知っています。しかし、世界のキリスト教徒たちのほとんどは、本当にその言葉を「信じ」ているように見えません。むしろ、できるだけ多く稼ぎ、人並みに愚かな贅沢をして暮らしたいと思いつながら働いているのが普通です。自分は生活を保てるギリギリのお金があれば十分だと言つて、残りは全て貧しい人たちに寄付をしてしまうという人など、ごく一部の例外を除き、ほとんどいません。信徒たちは、聖書の言葉を文字通りには実践できないことに内心では後ろめたさを覚えつつも、それはそれでいいのだと正当化する言い訳も用意しながら生きているわけです。こうした傾向は、平和や非暴力に関する教えにおいても顕著です。よく知られていますように、聖書には「敵を愛せ」とか「右の頬を打たれたら、左の頬も向けよ」と書かれています。しかし、それを文字通り「信じ」て実践するキリスト教徒はほとんどいません（中略）。

要するに、ほとんどの信徒は、その宗教の価値観を全体としては受け入れつつも、いくつかの教えについては実践したくないので実践しないわけです。実践できないような教えをなんとか実践できるように努力することがあります。多くの場合は、いくつかの教えについてはまったく実践する気もないまま、それにもかかわらず、その宗教を全体としては受容しようとします。全てを実践しなくても「信仰」であり、全てを「信じ」なくとも「信仰」である、というのが多くの人々によつて営まれている宗教の現実だと言つてもいいのかもしれません。

宗教というのは、（注5）倫理的教説にしても、（注6）奇跡物語にしても、それらを信じられないからといって、単に「信じられない」で終わってしまうものではありません。むしろ「信じられない部分」や「実践できない部分」があるからこそ、その宗教は人々の心や社会のなかに引っ掛かり続け、継承されるのかもしれません。私たちは、抵抗のないツルツルとした物はつかみにくく、多少ザラついていたりデコボコしたものの方がしつかりと握れます。（7）宗教においても、一般的の常識的感覚からすればザラつきをおぼえる部分、つまり「信じ」るのが難しい部分が必要で、それでもそれを握り続けるときに生じる摩擦熱こそが、宗教というものの体温になつていてるようにも見えます。

（石川明人『宗教を「信じる』とはどういうことか』より　一部改めたところがある）

（注1）信徒……その宗教を信じている者。信者。

（注2）使徒信条……キリスト教徒として信仰を明白に表現する言葉。

（注3）コリスト……古代ギリシャの都市。

（注4）聖書註解書……聖書に注を加えて本文の意味を説明しているもの。

(注5) 倫理的教説……道徳的なことに関する宗教の教え。

(注6) 奇跡物語……イエス・キリストが水をぶどう酒に変えたり死者を生き返らせたりするなどの不思議な物語。

(一) 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ブツカク b レイハイ c シシン d ジメイ e アンジ

(二) 本文中の □ A ～ □ D においてはまる語句を次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ ところで ウ たしかに エ それとも オ なぜなら

(三) 傍線部①「いま、どのくらいの日本人が宗教を「信じ」ている／いないのでしようか」とあるが、その説明としてもっとも適切なもの

を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 統計結果から、三分の二以上の人人が宗教を信じていないので、日本は完全な無宗教国家であることが分かる。

イ 日本では国民性から宗教を信仰することを隠す人が多く、統計の結果には無宗教か否かの実際の数字は表れにくい。

ウ 日本では無宗教の人が多く見えるが、実際は宗教と身近に接していることが多く、本当に大多数が無宗教なのかは疑問が残る。

エ 日本は他国に比べて宗教を信じていない人の割合が多く、それは国家として宗教が根付いていないことが原因である。

(四) 傍線部②「こうした傾向」を説明したものとして、もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宗教を心から信じることなく、教会に行きさえすれば神から救つてもらえると考える人が増えているということ。

イ 宗教を信仰し、それを周囲に表明することが恥ずかしいと考える若者が増え、教会を訪れる人が減少しているということ。

ウ 宗教を信仰している人は多くいるが、教会に行くなどの宗教的な活動を日常的に行う人が減っているということ。

エ 科学の発展により、聖書に記されていることが非科学的で信用できないと考える人が増加しているということ。

(五) 傍線部③「「信じる」とはいつたいどういう意味なのでしょうか」とあるが、神について「信じる」ことの意味を説明したものとして

もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神が存在しているのだということを客観的に証明することはできないが、その価値を疑う余地はないと考えているということ。

イ 全ての人々が神は存在していると思い込んでいて、その存在に疑いを持たないように意識しているということ。

ウ 本当は神の存在を疑つてしまっている自分を抑え込んで、神が存在していると思つている人の考えに合わせているということ。

エ 神の存在は他者に説明するのが難しいので、その存在を疑つているが、「信じる」という表現を用いるしかないということ。

(六) 傍線部④「本当に何かを信じ切つている人にとっては、自分自身のその「信じる」という行為は透明になつて見えなくなる」とはどのようなことか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は頭の中に「疑う」という選択肢があるから「信じる」という言葉をわざわざ口に出すが、本当に信じているものに対しては「疑う」こと自体が無礼なことになるので、「疑う」と対になる「信じる」という言葉の使用を避けるということ。

イ 人は頭の中に「疑う」という選択肢があるから「信じる」という言葉をわざわざ口に出すが、本当に心から何かを信じている人は、「疑う」という発想自体がないので、そもそも「信じる」という言葉を使うことがなくなるということ。

ウ 「信じる」という言葉を使うことは、自分が何かを「疑う」とことと表裏一体なので、何かを本当に信じている人は「信じる」という言葉を用いることに対して激しい拒否反応を起こし、「信じる」という言葉を使わなくなるということ。

エ 何かを強く信じている人は信じている対象に対して絶対の自信を持っているので、信仰対象が持つ疑わしい部分が見えなくなり、「疑う」と対になる「信じる」という言葉が必然的に用いられなくなるということ。

(七) 傍線部⑤「信徒たちが「〇〇を信じます」とわざわざ口に出す」とあるが、信徒たちが信仰を口に出すのはなぜだと筆者は考えているか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神はより多く信仰を告白した者を最後に救つてくれるを考えているため。

イ 信仰の告白によつて本当は神を信じていないということを隠し通すため。

ウ 教会の仲間に對して、自分が他より神を信じていることを表明するため。

エ 教会の仲間と神への信仰を確認しあうことで、教会の結束を強めるため。

(八) 傍線部⑥「信仰の基準である聖書においても、「まともにとりあわなくていい部分」、すなわち「信じなくていい部分」がある」とあるが、信徒たちが聖書に書かれている事柄を「信じなくていい」と判断する基準としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア その教え通りに行動したいと思うかどうか。  
イ その教えが法律に違反していないかどうか。  
ウ その教えが他者を差別するものかどうか。  
エ その教えを実践して富を得られるかどうか。

(九) 傍線部⑦「宗教においても、一般の常識的感覺からすればザラつきをおぼえる部分、つまり「信じ」るのが難しい部分が必要で、それでもそれを握り続けようとするときに生じる摩擦熱せきさつねつこそが、宗教というものの体温になつてゐるようにも見えます」とあるが、その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある宗教について、あまりにも理不尽で神の存在を疑うような教えがあつたとしても、その教えをどうにか実践しようと試みる信徒たちの努力が、世界中の人々の感動を呼び、全世界にその宗教を広めるきっかけになつてゐるということ。  
イ ある宗教について、それぞれの地域や時代の法律に違反するような教えがあつても、その教えをより法律に合わせたものに変えようと信徒たちが試みることによつて、その宗教自体が一層社会の人々からの理解を得られるようになるということ。  
ウ ある宗教について、実生活で忠実に守り、実行する必要性がないと感じる教えがあつたとしても、宗教の価値観を全体としては受け入れようとする営みが、その宗教が時代や場所を超えて信仰されていく原動力になつてゐること。  
エ ある宗教について、教え通りに行動することの正当性を感じない部分があるにもかかわらず、その教えへの疑いを隠し通すことでの神を完全なものに見せようとする信徒たちの営みによつて、その宗教の正しさが保たれるということ。

(③) 次の(一)～(五)の文章の内容から確實に正しいと言えるものを、後に続くア～ウの中から、記号であるだけ選びなさい。一つも正しいものがない場合は、「×」と答えなさい。

(一) 現在、世界中の人々が犬や猫をペットにしています。人間のペットになつたのは、猫よりも犬の方が早いと考えられています。もともと犬は人間の狩りを手伝うために手なずけられました。対して猫は、人間が貯蔵している穀物を狙うネズミを狩るために飼われはじめました。人間が穀物を貯蔵するようになつたのは、狩りを始めてからだいぶ後でした。猫がペットになるのが犬よりも遅くなつたのは、そのためです。

ア もともと、人間はかわいがるためにペットを飼つていたわけではなかつた。

イ 人間が穀物の貯蔵をするようになつて以来、犬は飼われなくなつた。

ウ ネズミは収穫前<sup>しうかまえ</sup>の穀物を食べることがある。

(二) 筋肉には横紋筋と平滑筋の2つの種類があります。横紋筋には骨格筋と心筋があります。骨格筋は姿勢を保ち、身体を動かしています。心筋は心臓をかたちづくる筋肉で、心臓以外の場所には存在しません。平滑筋は内臓や血管の壁に存在し、内臓や血管の働きの維持を行っています。骨格筋は自分の意志で動かすことができますが、心筋や平滑筋は自分の意志で動かすことはできません。自分の意志で動かすことのできる筋肉を随意筋<sup>ずいいたいきん</sup>、自分では動かすことのできない筋肉を不随意筋<sup>ふぜいたいきん</sup>といいます。

ア すべての横紋筋は、自分の意志で動かすことができる。

イ 横紋筋は、心筋の一種である。

ウ 平滑筋はすべて不随意筋である。

(三) 私たちは千円札をどこでも使えますが、1868年まで、国が作るお札はありませんでした。昔のお札は限られた地域の中でしか使えないものがかりだったのです。日本最初のお札は、17世紀のはじめに伊勢<sup>いせ</sup>で町の人々によつて作られました。昔のお金というと小判を想像しますが、実はこれも江戸時代の日本では統一されておらず、関東では金、関西では銀を使つていました。伊勢には日本中の人がお参りに訪れるので、金も銀も流通することになつたのが「伊勢だけで通用するお札」を作る一つの理由になつたようです。

ア 日本最初のお札は、伊勢だけで使えるものだつた。

イ 伊勢でお札が使わるようになつた結果、日本中のお金が伊勢に集まるようになった。

ウ 伊勢だけで使えるお札が、1868年に全国で使えるように改められた。

(四) 私たちの体内で、空気や食べ物はのどを通つて、空気は肺に通じる気管に、食べ物や飲み物は腸に通じる食道に入ります。気管の入り口のところには「喉頭蓋」というふたが付いています。喉頭蓋は、私たちが口からものを食べたり飲んだりすると反射的に閉まり、気管の入り口を閉じてしまいます。そのため、食べた物や飲んだ物は、誤って気管に入ることなく、食道の方へと入つていくのです。急いで飲み食いをすると気管にものが入りかけ、人間はせきこんで異物を外に出そうとします。これが「むせる」という現象です。

ア 喉頭蓋には、呼吸するときは食道の入り口を閉じる働きがある。

イ 気管の入り口のところを食べものが通るときは、喉頭蓋が入り口を閉じる仕組みになっている。

ウ 「むせる」時に出るせきは、体に間違つて入つたものを外に出す働きを果たしている。

(五) 紀元前490年に、ペルシャの遠征軍えんせいぐんとギリシャの防衛軍が、ギリシャ北東部の马拉松马拉顿という地で戦いました。人数はペルシャ軍の方が倍ほどでしたが、左右からはさみうちで奇襲きしゅうをかけたギリシャ軍がさんざんにペルシャ軍を破りました。ギリシャ軍はアテネ、プラタイアイという二つの都市から兵士が集まつていましたが、結束してよく戦つたようです。この時、味方が勝つたという知らせをたずさえて、ある兵士がアテネまで命をかけて走つたのがマラソン競技の始まりだと言われています。

ア マラトンの戦いは、ギリシャ軍がペルシャの地に攻めこんだ戦いだつた。

イ アテネとプラタイアイは同じくらいの人数の兵士を戦いに送りこんだ。

ウ マラソン競技のきっかけを作つた兵士は、ギリシャ軍の兵士である。

【問題は以上で終わりです】



令和六 中入 国語「中期B・J」解答用紙

金蘭千里中学校

(1)

(二)	a
(三)	b
(四)	c
(五)	d
(六)	e

(一)	1
(二)	2
(三)	B
(四)	C
(五)	D
(六)	E

(九)	(十)
(五)	(六)
(七)	(八)
(十二)	(一)
(十一)	(二)

(2)

(二)	a
(三)	b
(四)	c
(五)	d
(六)	e

(二)	A
(三)	B
(四)	C
(五)	D
(六)	E

(七)	(八)
(三)	(九)
(四)	(五)
(五)	(六)
(六)	(七)

(3)

(四)	
(五)	

(一)	(三)
(二)	(三)

得点	
受験番号	

令和六 中入 国語「中期B・J」 解答用紙

金蘭千里中学校

(1)

(二)	a	配 置
(三)	b	格 好
(四)	c	再 開
(五)	d	意 向
(六)	e	論 論 法

(九)	工	了	(六)	工	了
(十)	ウ	ウ	(七)	ウ	イ
(十一)			(八)		イ
(十二)			(九)		
(十三)			(十)		

(2)

(二)	a	仏 閣
(三)	b	礼 拝
(四)	c	指 針
(五)	d	自 明
(六)	e	暗 示

(七)	工	ウ	(四)	工	ア
(八)	ア	ウ	(五)	ア	ア
(九)	ウ	ア	(六)	才	イ
(十)			(七)		
(十一)			(八)		

(3)

(四)	イ・ウ	ア
(五)	ウ	
(六)		

得点	
受験番号	